町民C、勇者様に拉致される２

登場人物紹介
◀勇者
町民Cを連れて、魔物を倒す旅をしている、とても強いが無表情な男。
深蒼の勇者と呼ばれている。
町民C▶
ごく平凡な一庶民だったが「神子」と呼ばれて勇者たちの旅に同行。
心のなかで常にツッコミを入れている。
▲神官
勇者の幼馴染で、ともに世界を救う旅をしている。知識が豊富。
世界の外にいる▶「彼女」
「欠片」を集めている謎の女性。
▲始原の勇者
攫われた町民Cの前に現れ、これまでの世界の歴史を語る。
お兄さん▲
サニディン騎士団員。ムキムキの肉体だが目がおそろしくつぶら。
▲ルース・サニディン
町民Cを探すために、勇者たちが取引した相手。
アノーツクレス五人衆の一人。
あねさん▲
（ヘリオドール隊長）
町民Cを人攫いから助けた騎士団の女隊長。サニディンの部下。

1　神子(みこ)、新しい街に行く

頭の上を変な馬っぽいのが飛んでいくのを、しゃがみながら見送りました。

ひー！　ちなみに馬っぽい何かは、さっき勇者様に殴られた魔物です。なんであんなのが吹っ飛ぶの。きれいな放物線を描いて、私の背後に落ち、魔物は消えました。瘴気(しょうき)の濃いピンク色がぱっとはじけます。相変わらずお見事ですね。

こんにちは、神子をやってる町民Cです！

職業・神子は……無職よりはいいだろうって泣く泣く受け入れたよ！　無職はつらい……まあ、今も働いているかって言えば、微妙だけどね。でもまだ他の人への自己紹介は、できません。それどんな羞恥(しゅうち)プレイですか。実態と名称のギャップがありますよねっ。

今日は荒野の真ん中で、頭を抱え込んだまましゃがんでいます。

ちなみに勇者様と神官様は戦闘中。

私は足手まとい以外の何ものでもないから、離れてじっとしているところです。私は置物ですよ、私はそのへんの岩ですよ。風景ですのでどうぞお構いなく。特に魔物さん、お構いなく！

お枝様を持ったまま足を抱えて座る私は、ぱっと見、優雅に観戦しているみたいに見えるけど、

違うよ！　結構必死に観戦してます。万が一魔物が吹っ飛ばされてきたら避けなきゃいけないしね。素早さが鍛えられます。あ、石が飛んできた。座ったまま横にずれます。私の横を、石がカツンと跳ねながら飛んでいきました。

　こんなところで座っていて、大丈夫かって思うよね？

　何故かわかんないけど、大丈夫なんだ。魔物の皆さんは、私を岩かなんかだと思っているみたい。基本攻撃されません。これもお枝様効果でしょうか？　勇者様たちは普通に襲いかかられています。

　初めの頃は魔物を見ただけで怖くて固まってたけど、魔物は全部私をスルーしてお二人に襲いかかっていくんだよね。私に襲いかかってきても、硬直するぐらいしかできないから全く問題はないけど。その状況を見た神官様が、おとなしく観戦していてください、と笑顔でおっしゃいました。私の動きが鈍いのは明らかですからね！　ありがたく観戦だけしています。あ、荷物もちゃんと見てるよ！　それぐらいは働きます。

　神官様が手に持った杖で変なドロドロをふっ飛ばしました。ドロドロの核っぽいものを潰したみたいで、一撃で片がつきました。びちゃって何かが飛んでますよ！　魔物が瘴気に変わり、霧散します。飛んだのも消えました。洗う手間が省けましたね。今は太陽が出てるから、大部分の瘴気は一瞬で消えます。瘴気が溜まらないので、私は仕事がありません。穀潰しまっしぐらです。

　神官様、意外と肉弾戦に強いみたい。服の下は筋肉なんでしょうか？　まさか着やせタイプ？うらやましい……。私は胴回りは着やせせず、胸は着やせします。残念なことにね！

　そうこうしている間に、神官様は次は犬っぽいなにかを鋭い突きで倒しました。簡単そうに動いているけど、私には絶対無理。歩くだけで筋肉痛なひ弱町民です！　てっきり私、神官様は星術で敵を倒していくんだと思ってました。でも本人に言わせると、

「魔物が多いときは術がいいんですが、少ない時は殴った方が速いですから」

だそうです。意外と武闘派ですか、神官様。

　勇者様は、さっきまで相手にしていた植物っぽい魔物を片付けたみたい。剣がなかったら殴り飛ばすけど、やっぱり剣があるほうが効率的なんだって。確かに見ていると、剣で傷を与えたときのほうが消滅まで速いみたい。前の街を出るときに、勇者様は剣を予備で五本買っていました。その経済力に私はビビりました。予備は陸馬さんに積んでいます。それにしても五本ってどれだけ潰すんですか勇者様。ちなみにまだ一本目です。買ったとき神官様が無駄遣いはしないでくださいねって笑顔で釘刺してました。目が笑ってなかった。あれ、怖かったです。勇者様の返事もちょっと間が開いてたから、そこはかとない圧力を感じ取ったのだと思われます！　ちなみに怪我もしないように気を使ってるみたい。理由はまあ、あれだけど、とりあえずはこれでよし！

　勇者様が剣を鞘に納めました。神官様も一息ついているようすです。勇者様が戦闘態勢を解いたら魔物がもういないって合図なんだ。私も学習しました。でも一体なにで感知しているのか、謎です。私はスカートの土を払ってお二人のほうへ向かいます。怪我がないみたいでよかった。意外と見ているだけも疲れるんですよ。声を出したら魔物が気づきそうだから口を押さえてじっとしてるけど、それもハラハラしてつらい。

　戦闘に参加するなんて無謀だからこれでいいんですけどね！

とにかく、やっとお仕事の時間です。お日様の光があるから、本当に軽作業なんだけどね。

私は戦闘をしたあたりでお枝様を振って、

「sh0wwkvw　hxxx　fwwy0ww./」

——瘴気は不要です。

と呟(つぶや)きました。ふんわりとぬくもりを持った風が、優しく撫でるように吹いて消えます。瘴気のピンクは見えないけどまだ漂っているかもしれないから、念のため浄化しておくのです。

前の星術より短い言葉だけど、なんとこれだけで薄い瘴気だったら、お枝様効果でなくなっちゃうのだ！　すごい！　私でもできるぐらい簡単です！　小さな瘴気でもコツコツと消していけば、いつか世界のためになるかも。なればいいな。とりあえずただ飯(めし)は食べられません。働くよ！

勇者様たちが戦う、その後私が浄化するっていう流れ作業です。私も素早く戦闘中に退避するスキルが身につきました。なんとなく役割分担が出てきた今日この頃です。

領主様のエロ屋敷を後にして、既に二週間が経過しました。今から思えば、あそこでの出来事もいい思い出です。あんなインパクトのあるお屋敷はないよ！　最近は勇者様の無表情にそれほどびびらなくなりました。進化です！

陸馬さんがポー、と鳴きました。あ、ご飯の時間ですね。私じゃなくて陸馬さんのだよ。幾ら私が食べるのが大好きだって、そんなに頻繁に食べてはいない！

それを見たのか、

「休憩しましょうか」

爽やかに神官様がおっしゃいました。勇者様もこちらへやってきました。

たまに神官様、戦闘後にすっきりした顔をされているけど、それって突っ込んでいいんだろうか。日頃のストレスを戦闘で発散してるんだろうな。

私はお枝様をそっと横たえて、陸馬さんの背中に置いた荷物から餌の干草をごそごそ出します。お世話係は私が立候補しました。いつも乗せてもらっているしね。それにお世話していたら、いくらでもモフモフさせてもらえるかも、という狙いもありますが。

こんな風に、のんびりと荒野の旅が続いています。

草をもごもご食べる陸馬さんの横に私も座り、パンの欠片(かけら)を口に入れます。

うっ。やっぱり歯がたちません。このパンはとんでもなく硬い。日持ちさせるために、水分をわざと飛ばして焼いているせい。独特な味がするんだよね。ちょっとすっぱい。水をちびちび一緒に飲みながら口の中でふやかしたら、ようやく噛めるぐらいの硬さに戻ります。このちょっとやわらかくなってじゅわっとしたところが好きです。これはこれでいける。

座り込んでパンを噛んでくつろぎ姿勢の私と、先程の戦闘で使った剣を簡単に手入れしている勇者様と、地図を広げだした神官様。お二人ともあまり喋らないので、道中はこんな感じで静かです。陸馬さんがポーって鳴くぐらい。

神官様が地図を見ながら、

「……次の街は、あまりあなたを連れていきたくはないんですが」

とおっしゃいました。美人なのに、眉間に皺を寄せています。もったいないですよ。

次の街に興味津々だった私は首を捻りました。なんでですか？　私はパンを噛みながら神官様と目を合わせます。神官様は苦笑しながら地図を指して、大陸の中央付近を私に見せてくれました。

「この辺りが、つい先日までもっとも栄えていた部分です」

一番大きな大陸の真ん中より上ぐらい。つまり星都の上あたり。だいたい地図って星都を真ん中にしているんだって。というより、星原樹をど真ん中に地図はできているらしい。半端ない樹様ですね！

神官様に近寄って地図を一緒に見ます。まだパンが十分やわらかくないから呑み込めません。もぐもぐしながら失礼します。

「ここがまず魔物の被害にあい、壊滅的なダメージを受けました」

指でぐるりと描かれた範囲は、意外と大きかったです。地図の十分の一はあるかも。私は驚きのあまりパンを呑み込みかけました。

「壊滅的って……」

そういえば、パン屋を休む話をしたとき、おかみさんの娘さんが隣の大陸から逃げ帰ってきていたな、と思い出しました。……まだ二月たっていないのに、ものすごく昔みたいな気分になるけど。

神官様が指でぐるっと描いた内側には、幾つも街がありました。

「魔物の群れに襲われ、街が幾つか消滅しました。幸い星都は勇者が選定を受けた直後だったので、総力戦で守りましたが」

その言葉を聞いた途端、私の頭の中に生々しい光景が広がりました。

家が燃え、空が真っ赤に染まっています。熱気で歪んだ空気、崩れた石垣、壊された生活用具。散らばる食料に目もくれず、人々を襲う魔物たち――まさに悪夢でしかない光景。幻のように立ち上ったそれは、始まった時と同じように唐突にそして一瞬で、あわい湯気のように消えました。

まるでその場所にいたかのような幻に、私は硬直しました。生々しすぎて鼻の奥に焦げた臭いがこびりつきそうなぐらい。

「……どうしました？」

神官様が訝しげに私の顔を覗き込みます。私は何のことかわからず、首を傾げました。

「顔が真っ白ですよ」

私は何とか噛み切ったパンをごくりと呑み込んで、

「大丈夫です！」

と返事をしました。ちょっと食欲が落ちましたけどね！

今の、なんだったんだろう？　想像力豊かでも、あそこまで想像するのは無理。もしかして昨日見た悪夢とか？　いつも夢は、目が覚めるとさっぱり忘れています。誰の記憶だろう？　って思ったけど、そんな他人の記憶がまじるはずはありません。そろそろ記憶力を鍛えるべきなんじゃないですかね！　でもどうやってそんなの鍛えられるの。

「……体調が悪くなったら、すぐに言ってください」

まだ心配そうな神官様に、首を勢いよく振って約束しました。ご心配をおかけしましたっ。大丈

夫ですよ！

「ともかく、これから回る地域は、被害が大きかった場所に近いことは、先日説明しましたよね？」

「たぶん聞いた気がします！」

私はいい笑顔で答えました。神官様はにこりと笑って語尾を疑問形から念押しに変えてきました。

「説明しましたよ」

「……もう一度お願いします先生！」

二度手間、申し訳ないです。うすうす私が忘れているのには勘付いていらっしゃったようです。

あの時は地図がなかったから、なんとなく「へー」と聞き流してしまったんだよね。

神官様は根気強くもう一度教えてくださいました。一緒に地図を眺めながら今度はちゃんと説明を聞きます。

どうやら勇者様稼業というのも難しいようです。

特定の地域を回りすぎても、「こちらへは何故来てくれないのか」と言う声が上がったり、「ひいきだ」と言われたりするそうです。満遍なく、いろんなところを回らなければならないんです、との神官様のお言葉。私は首を傾げました。勇者様一人訪れるだけで、そんなにいろいろ変わるものなのかな？　確かに勇者様の力とかすごいけど。私がよくわかっていないだけかも。

各方面をバランスよく回りながら、みんなの安全を確保する。

わあ、聞くだけで胃が痛くなるじゃないですか！

とりあえず今は各方面の意見を調整して、大陸中央部に走っている重要な街道を安心して使えるようにするために旅しているそうです。ここの安全が確保されない限りは、物流も人の流れも滞って、復興が遠のくそう。今いるのもその関係の場所らしい。そういえば、多少歩きやすい道でしたね。たまに壊れた石畳とかあったけど。とはいうものの、それ以外の地域からも来てほしいっていう嘆願も多くて処理しきれないのだと神官様がおっしゃいました。

「旅の途中の私たちに直接依頼があるわけではないのですが、星都（せいと）や主神殿に、高貴な方々から突き上げが来るそうです」

そういうわけで順繰りに回っているんだって。大変ですね、有名人も！　無名でよかった私！

「最近は、あなただけよこしてほしいとか言われることもあるようです。もし、そんなことを言われても行かないようにしてくださいね」

「え？　私ですか？」

逆にビックリですよ。ただの枝持ちですから！　役には立ちませんよ。

「あなたについても噂が一人歩きしていますからね。美味しいご飯に釣られたりしたら、ぱくりとやられてしまいますよ」

ぱくりってなんですか。可愛らしく言っても、黒い何かしか伝わりませんよ！　それにしても酷い。私、どれだけご飯に釣られると思われているんですかっ。

「そんなに子供じゃないですよ」

さすがに反論します。すると意外なところから突っ込みが入りました。

「合計六回」

勇者様がぽつりと呟(つぶや)きを落としました。

「六回？」

何のカウントですか？　私は神官様のほうに乗り出しかけていた体を引き、勇者様にジト目を向けます。勇者様は剣の手入れを行いつつ、続きを口にしました。

「先日の領主屋敷で、メイドから菓子を貰って食べていた回数だ」

「知ってる人だし、ついていかなかったですよ！」

ちゃんと確かな人からしか貰ってないよ！　心外な。でも実際は六回以上いただいたことは、私の胸に仕舞っておいたほうがよさそうです。

私の反論に勇者様が続けて言います。

「知らない人から貰わないのは基本だ。あと、すぐに警戒心を解いてろくに知らない相手を部屋に入れない」

む？　私が常にそんなことをしてるとでも？　記憶にございません。だけど、私の不満げな顔を見た勇者様が突っ込みます。

「旅についてくる前に、あっさり信用して部屋に入れようとしたのはどこの誰だ」

えー？　しばらく記憶を探します。探します……

「そんなことありましたっけ？」

ぶっちゃけ覚えてません。勇者様はとうとう無言になりました。呆れているのかどうなのか、なんだか微妙な反応ですよ！　なじるなら、なじってください！　生焼けの魚ぐらい辛(つら)いっ！　この

中途半端感がなんとも言えません。

神官様はさらに私に言い聞かせました。

「とにかく、ついていかない、物を貰わない、さあ、復唱してください」

「ついていかない！　物を貰わない！」

私はやけくそになりながら復唱しました。ちゃ、ちゃんと覚えますよ！　なんでそんなに懐疑的なんですか。

「神官様、私は幼児ですか！」

「幼児程度には物覚えがいいことを、星神様(ほしがみさま)に祈りましょうか」

うっ。心をえぐる言葉でした。まさかの幼児以下宣言です。

「ともかく、様々な人々がこれからも関わってくると思います。中には本当に困っている人もいると思いますが、私たちの名前を利用しようとする人もいます。次の街は、特に治安が悪化していると情報がありました。近づいてくる人物の見極めはある程度私でしますから、あなたは自分の身を守ることを考えてくださいね」

まさかの真剣な忠告に、私は頷くしかありません。それにしてもどこから噂を仕入れてきているんですか！　謎です。一度小さな村に補給に寄った以外は、荒野ばっかり歩いていたはずだけど。

とりあえず、知らない人に食べ物を貰わない。心に刻みました……。微妙にツライですけどね！

お話が終了して、移動の時間です。私は陸馬さんによじ登りました。私は歩くのが遅いので、大

体陸馬さんに乗って移動しています。あれから二回ぐらい戦闘があったけど、私は相変わらず空気としてひっそりすごしました。

時々ヒヤッとするけれど、今のところ、戦闘で恐怖を味わったことはありません。半端ない安心感です。さすが勇者一行！　凄いね！　私はカウントに入れなくていいけど。

それにしても、魔物って見た目がグロテスクだったり変な汁とか飛ばしていたりするけど、何故かあまり臭くはないんだよね。

戦闘が終わったら、不思議と汁や血っぽい何かまで、綺麗さっぱり瘴気(しょうき)になって消えます。瘴気はできる限り吸い込みたくないから嗅いでみたことはありません。お二人が言うには特に臭いはないらしいけど私は見えるから避けまくっています。ごめんね！　どちらかと言うと魔物より陸馬さんのほうが獣臭いぐらい。

神官様によると、魔物が生物かどうかは、専門家の間でも意見がわかれているんだって。何の専門家ですか！　それも聞いてみたらどうやら魔物研究している人がいるとか。どの分野でもマニアックな人がいるんですよ、と笑顔で言われました。今度、機会があれば本を見せてくれるそう。『たのしくがくしゅうシリーズ！　ふしぎないきもの、きょういのまものじてん』が私にお勧めだそうです。その本によると、地域ごとに魔物も特色があるので、気候に影響されるのではとか何とか。詳細な説明はさておき、……なんだかまた子供向けな気がする題名なんですが。そこは突っ込み待ちですか？　神官様の読書の範囲がわかりません。そういえば、前に廃墟で拾ったものまで目を通していたよね。ある意味突き抜けすぎてます。さては、文字なら何でもいけるクチですねっ。

それはともかく。魔物自体は怖い。でも比較的私がけろっとしているのは、戦闘が終わった後に魔物が綺麗に消えてしまうのがかなり大きいです。生々しさが結構薄まっていると思うんだ。そうじゃなかったら、切り裂かれた魔物の死体が転がる光景にきっとびびってた。トラウマものです。戦闘のたびに勇者様が魔物の血まみれ肉まみれだよ！　斬(き)ったり殴ったり裂いたりしているから。血まみれ勇者様……そんなホラーはお断りだ！　あ、神官様は結構長い杖で殴っているから返り血はないみたいです。さすが星職者。違うか。

結局、神官様が話していた街には、半日ぐらいで到着しました。

城門の上に、ブロンザイトって書いてあります。わかりやすい表示ですね！　これで地図のどこか悩むことはない！　でもまず地図が頭に入っていないから、ここがどこかわからないんですけどね。

神官様が言っていた魔物の襲撃は、今もたびたびあるみたい。城壁や周りの地面に跡が残っている。魔物は消えるけど、それに与えられた損害は消えません。

街を囲む城壁に焼け焦げがあったり、崩れているところを無理やり補修したりしてるのがわかる。周りの木や草も焼け焦げがあるところを見ると、火を吐く魔物か、火の星術を使う人がいたんだろうな。あまり、街の近くで放火はしないでくださいね！　よその街のことながら心配になってきた。

そういえば、神官様がそんな星術を使ってるのは見たことがありません。星術の系統は、神殿で勉強しました。火を出したり氷を出したりして攻撃する人もいるらしい。神官と魔術師の違いもい

ろいろ聞いたけど、私は半分しか覚えてないです！　サボっていたんじゃなくて、半分で勇者様がお迎えに来たんだよと主張します。居眠りはしそうになったけどねっ。興味ないことを聞くのって、なんであんなに辛いんだ……

門の前にできている列に並びます。街に入るには手続きが要るそうです。私がいた街は、結構そのあたりゆるかった覚えがあります。いろんなところを回っているうちに、あの街ってもしかして現状にあるまじきのんびりさだったんじゃないかなって実感してきています。早く平和になって帰れますように！　ちょっとセコセコした、のんびり庶民ライフに戻りたいです。

門は昼間なのに狭くしていて、門番さんが検問をしている様子。隊商の人たちが列を作って待っていました。その後ろに私たちも並びます。

私は物珍しさからきょろきょろ周りを見ていました。商人さんと目が合って微妙な顔をされたけど気にしない！　田舎者で申し訳ないです！　まだまだよその街は珍しいんだ。おのぼりさん丸出しです。

街の大きさは、ここから見る分には前の街と変わらないみたい。ビックリするほど大きな街ではありませんでした。ここには美味しい名物とかありますかっ。私はご当地グルメっていうやつに並々ならぬ興味があります。前に貸し本屋さんで、旅行記という名のグルメ探訪記を読んだんだ。その時からご当地グルメという響きにときめきを感じていました。でも街の外に出るつもりがなかったから内容はほとんど忘れてます。どの街のなにが有名かもっとチェックしておくんだった。今こそあの本が必要ですよ。

手続きに思わぬ時間がかかっているみたいで、かなり暇です。私は陸馬さんから下りて、おやつの干草をあげました。

太陽が少しだけ傾いた頃ようやく順番が回ってきました。それから神官様と門番さんがお話しています。場所によっては街に入るだけで税金が必要なんだって。

さっきの休憩の時、この街では特に勇者一行と名乗らずに入る予定だと説明を受けました。理由はわからないけれど、神官様がそう言うならそっちの方がいいんだろうな。なので私はがっつり素顔です。ベールの出番はないはず。ウフフ、顔に風を受ける生活っていいですよね！　日焼けしすぎたら赤くなるから気をつけないといけないけど。

神官様が護符を出して話をしている様子。星神殿の人を疑うことはあまりないから、身分証明にいいんだって。確かに初めにお二人と話したとき、私も護符を見て安心した気がする。門の詰め所の兵士さんたちは、みんな疲れているみたいだった。空気がぴりぴりしているのがわかる。魔物のせいだろうな。門に残る戦いの跡を眺めていると、トリハダが立ちました。あれほどの力を持つ魔物に襲われたら、私だったらぷちって終了ですよ。まだ、あの魔物っているのかな。

なんとなく不安になって横にいる勇者様を見たら、この人はいつも通りでした。そのことに安心します。今回はよそいきモードではないみたいで、普通に無表情のままです。これに慣れてきたのはいいことなのか悪いことなのか、わからないけど。これもある意味進化！　私も日々、グレードアップしています。

青い鎧は分厚いマントでほぼ見えないから、勇者様も普通の旅人っぽく見えるはず。真っ赤な鎧

とか金ぴかのマントとか売っているって武器屋のおっちゃんに聞いたことがあるから、派手な色の鎧は思ったより普及してるのかも。でもそんな派手な格好をしたら、魔物の標的にならないのかな？　普通に不思議です。

長い交渉が終わり、神官様が戻ってきました。笑顔に少しだけ疲れが見えます。お疲れ様です。

「お待たせしました」

帰ってきた神官様は、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、気をつけてくださいね、とおっしゃいました。出発するために、陸馬さんに乗ります。ゆっくりと陸馬さんが門の中に進んでいきます。

街に入った途端、私は胸がモヤモヤするのを感じました。

なんだろう、この街の空気。何か、変だ。

何に引っかかりを感じたかわからないまま、私はぐるりと周囲を見回しました。往来にはそこそこの人の数。でも女の人は少ない気がする。あまり外出していないのかな？　空気が、いがらっぽい。みんなが歩くたびに砂埃が巻き起こって、風が黄色っぽく染まります。肌とかに砂がつきそうでイヤだな。

建物は、前に見た街と大して変わりがありません。距離的に離れてないし、地形もほぼ同じ。そういった場所では街のつくりは変わらないそうです。海辺とか、山間とかだったらさすがに変わってくるらしいよ。凄いね！　このあたりの知識は、お察しの通り神官様の受け売りです。絶対、雑学王だと思う。歩く辞書ですよね。先生と崇め奉られるレベルです。

まだメインストリートを抜けていません。私は陸馬さんの上でまだキョロキョロしました。

がたがたと荷馬車を引いた陸馬が通り過ぎます。隊商の商人たちみたいです。あの陸馬さんは派手なオレンジでした。本当にこの種族は保護色を一体なんだと思っているんだろうね！　可愛いからいいけどっ。

違和感の正体をつかめず、私は首を捻りました。

「ちゃんと前を見てくださいね」

横を歩く神官様に注意を受けました。

「了解しました！」

背筋を伸ばして前を見ます。前を見ながら、

「何かこの街、変じゃないですか？」

神官様に質問です。先生、教えてくださいっ。でも返ってきた答えは、

「何が変だと思いますか？」

まさかの質問返しですよ。うーむ。

そう言われてもう一度考えます。建物の前に溜まる人々をじっくり観察してみました。看板がかかっているから、酒場っぽい。皆、中に入らずに恐る恐る窺っている様子。中から酷い罵声やお皿が割れるような音が続いている。喧嘩かな。

「……昼間っから、酒場で喧嘩してますね」

これが深夜なら、住んでいた街でもたまにあった光景です。でもこんな時間から飲んだくれが徘徊してるってどうなの。太陽はまだ頭上に輝いて、真昼間ですよ！　酔っ払いっぽい人がうろうろ

しているのも、一人や二人ならわかるんだけどこんなに大勢なんて初体験です。皆お酒を飲んでご機嫌じゃなくて、暗い目をしています。目が、何かどんよりしているんだよ。楽しいお酒じゃないのがよくわかる。

それに気づいて、私は改めて周囲をぐるりと見回しました。

ああ、そうか。笑っている人がいないんだ。

なんだかみんな俯（うつむ）くか、暗い顔をして歩いています。立ち話をしている人たちも深刻そうな顔をしてる。まあ、ニコニコして歩く人も少ないとは思うけど、この陰気率は異常だと思います。たぶん空気に色をつけたら薄ぼんやりした灰色になるかも。暗い！　この街暗い！

「あと、なんだか全体に暗いというか」

一つに気がつくと、だんだん、他のことも気になってきました。

路上生活者が沢山いますね。裏の路地だけではなく、メインストリートでも俯いた人々が道の端に座り込んでいます。

私の視線に気づいた神官様が言いました。

「壊滅した街の人々が、難民となってこの街に流入したんです。しかし、着の身着のまま逃げ出した人たちにお金があるわけがなく」

こうなってしまったのだ、と。路上生活をする人を指しているのがわかる。

「本来は神殿や施政者側で対処すべき問題なのですが、このような街が多すぎて手が回っていないようです」

話をする神官様の視線の先にはやせ細った子供がいました。明らかにボロを纏（まと）っていて、難民とわかります。その子供が人にぶつかりました。案の定怒られて乱暴に突き飛ばされる。子供は幸い怪我がなかったのか、すぐに立ち上がって走り去りました。

その小さな背中をぼんやりと見送っていると、先程子供がぶつかった男が怒りの声をあげました。スリだ！　チクショウ！　私は思わずもう一度子供が去っていった方向を見たけど、もうその背中は見えませんでした。怒り狂う男に対して、周囲は冷淡な反応です。掏（す）られるほうが悪いと、歪（ゆが）んだ笑いを向ける人すらいます。

それを見て、私の背中に変な汗がにじみます。なんだろう、怖いな。

この光景がこの街での日常なんだと思う。私は今まで比較的治安のよい街に住んでいたから、こんな風に日常の中に犯罪が溶け込んでいることにビックリしました。

「ないときは、あるところから奪い取れ、だそうですよ」

神官様が疲れた雰囲気で零（こぼ）しました。星職者としては複雑な心境なんだと思う。星神様（ほしがみさま）の戒律（かいりつ）になんかあった気がするし。盗んじゃいけないよ、とか。

「だから気をつけろ」

不意に勇者様が口を開きました。滑（なめ）らかな声は喧騒（けんそう）の合間を縫って、私の耳にきちんと届きます。勇者様は陸馬さんの手綱（たづな）を持っています。私のほうをちらりと見て、勇者様は続けました。

「お前はこの街において弱者だ。狙われる」

そうだよね！　明らかに私は弱いのがよくわかります！　スリにあっても気づかないと思うよ。

「気をつけます」
　覚えていますよ、食べ物を貰わない！　知らない人についていかない！
　あれだけ心配されたのもわかる気がしてきました。むしろ、今その危険を実感しています！
「国としては、廃墟となった街を復興させるために元の住民たちを元の街に送り返したいらしいのです。しかし、安全が確約できない、また魔物がくるかもしれない故郷へ帰りたがる者たちはいません。結果、何もかもが宙ぶらりんになっているんです」
　神官様が悲しそうにおっしゃった。
　実際、彼らはどこにも受け入れられることがなく、難民となってしまうことが多いそうです。たまに良心的な領主様がある程度食糧を配給したとしても、それだけでは難民たちには足りません。そこで難民たちは生活苦のために犯罪に手を染める。結果、難民を受け入れた街の治安が悪化し、難民たちが更にうとまれる。悪いことが悪いことを呼び、どんどん悪くなっていくそうです。
「街道の安全もままならない状態では、まず何もできませんからね。早急に主要街道周辺を安全区域に戻したいのですが」
　なかなか難しいのです、と言う神官様の声は空気に溶けるぐらい弱々しかった。相当参っているらしい。
「街道の安全って、どうやって守るんですか？」
　私の質問に、神官様は答えてくれようとしたけど、先に宿についてしまったようです。
「またあとで、ですね」

　宿は結構立派でした。しっかりした建物で、でもあまり人気（ひとけ）がありません。その店構えに私はぽかんと口を開けます。なんだかいつもより高級な宿みたいなんですがっ。
　従業員さんが入口のカウンターで出迎えます。神官様が交渉を始めました。私は宿の中に入らず、もう一度、後ろを振り返りました。
　なんだか、違う世界に来てしまったみたい。
　私は漠然とした不安を抱えながら街の風景を見回します。普通の街のはずなのに、得体の知れない何かがありそうで、ぞくりと寒気が奔（はし）ります。そのとき、軽く背中を掌（てのひら）で押されました。いつの間にか横に立っていた人を見上げます。勇者様だ。
「疲れたか？」
「大丈夫です！」
　気を使わせてしまったかな、と思って、反射的に元気に答えました。ならいい、と再度軽く宿に入るように促されます。
　街の雰囲気に呑まれている場合じゃないよね！　よし！　気合を入れていくぞっ。握りこぶしを作って気合を入れてたら、勇者様に不思議そうに見られました。居たたまれないから、そんな目で見ないでくださいっ。
　神官様が困った顔でこちらに振り返りました。
「部屋が一つしかないそうです」

いつもは一応、男女別とかにしているんだけど、空いてないものは仕方ないよね。みんな安全を求めてある程度の宿に泊まろうとするんだって。私でもお金があればそうすると思います。

別のところを探すかとお二人が話していたので、私が「一緒でも全く気にしない」と主張しました。逆に「気にしなさい」と神官様に突っ込みを受けたけど。えー、経済的だと思いませんか、三人一部屋！　一人一部屋の時の、おおよそ三分の一ですよ！　つまり、ごはんに換算したらすごいことになりますよ！　それを主張したら、神官様に、計算は速いんですねと誉められた。計算「は」のところが強調されたように聞こえましたけどね。誉められたと思ったけど、もしかして誉められてない？

チェックインの時、宿の人が勇者様に変なことを言ってました。ちょっと離れていたけど、私は恐怖の地獄耳を持っています。聞き逃しません。従業員さんはかわいい子連れてお楽しみですね、両手に花状態だとか言ってました。しかもチラチラとこっちを微妙な目で見るんですよ！　そんなんじゃないですって。微妙に誉められたような気もするんだけど、これも嬉しくないです。なんかさっきから嬉しくない誉められパターンばっかりですね。あ、勇者様がイヤなんじゃないよ！　なんだかあの従業員の人の目線がねっとりとこう……品定めをするみたいでイヤだったんだ。鼻が大きい男の人だった。鼻を引っ張ってぐりぐりしたくなります。しないけど。

そういえば、こういった下ネタを言われるのは勇者様が担当ですよね。領主様も一生懸命勇者様にナイトフィーバースポットを説明してたなあ……結局、あの情報は役に立ったのだろうか。聞いたら聞いたで、また注意されそうだから言わないけど。逆に神官様はああいったことを言われない様子。雰囲気とか？

んん？　今何かに引っかかった。

さっき勇者様は両手に花と言われてました。

両手に花ということはっ。……神官様、また女の人だと思われてるみたいですね。普通に喋ってるのに！　美人とは、悲しいものなんですね……。ご本人は気づいているのかいないのか、はたまたいつものことなのか、スルーしていましたが。

とりあえず部屋の中に入ります。なんだか少し落ち着いた気がしますよ。屋根って素晴らしいですね。最近野宿続きだったからなおさらです。

すぐに勇者様が窓やドアを確かめはじめました。鍵のあたりを念入りに見たり、蝶番（ちょうつがい）を触ったり。なんだろうとジッと見ていたら、気づいて説明してくれました。どうやら変な仕掛けがないか調べてるらしい。なんですかそれ！　なんと治安の悪いところだと、外から開くように仕掛けがされているときがあるそう。怖いなあ、という反面、勇者様は何故調べられるのかとまた疑問がわきましたよ！　この人もできることの範囲が広すぎます。

神官様が星術を使い始めました。しかもちゃんと消せる白墨で、床に何か書いてまで術を使っているみたい。簡単に侵入できないように、この部屋に結界を作ったんだって。持続させるために書いているそうです。簡単に侵入できないように、この部屋に結界を作ったんだって。持続させるために書いているそうです。奥が深いですね。

それにしても、荒野を旅していたときよりかなり警戒が厳重なんですが……。まあ、荒野ならお枝様を地面に刺しておけば魔物避けになるらしいから、わざわざ結界を張る必要がないのもあるけど。お枝様はいつも通り布でぐるぐる巻きの封印状態です。

それにしても、お二人のこの警戒。そこまでこの街って怖いところなんだろうか。

犯罪とか、雰囲気とか、変だなあって思うぐらいなんだけれど。私が思わず、

「厳重ですね」

って率直な感想を言ったら、神官様が、

「魔物相手の方がまだ気楽でいいかもしれませんね」

とぽろりと零されました。その気持ちがちょっとわかってしまいます。だって、襲いかかってくる魔物は単に撃退すればいいだけだけど、泥棒さんは捕まえるにしても怪我させていいかどうかも悩むしね！

「……いえ、すみません、さっき言ったことは忘れてください」

神官様が落ち込んだ様子で付け加えました。

「大丈夫ですっ。忘れるのは得意ですから！」

胸を張れることじゃないんですがっ。落ち込まないでくださいね。

私も部屋を調べてみました。といっても、家具とかを眺めるぐらいだけど。床は石、壁は木でできています。丈夫そうだね！

小説でよく読んだ、床には実は穴が開いていて隠し扉がっとかはなさそうです。床を叩く私を、勇者様が微妙な表情で眺めていました。私は想像力が豊かなんですよ！　ここに落とし穴があったらどうするんですか！

「床には何もない」

「穴とかないんですか？」

「見ればわかる」

えー。私はちょっとガッカリしながら立ち上がりました。でも見ればわかるってどういうことなんだろう？　トラップを見抜く技術を持っているんですか？　あっても驚かないけどね！

ベッドは二つ、大き目のソファーが一つ。申し訳程度の小さなテーブルが一つ。椅子はソファーがそれを兼ねてるんだろうな。一応、ソファーでも寝られるように、毛布が一枚付いています。

これで三人部屋と主張するとは！　宿の人は変な笑いを浮かべて、ベッドは少なくてもいいですよねとか言っていましたね。こんな狭いベッドで一緒に寝られないよっ。簡素な寝台は、思ったよりは汚くなかった。一応掃除はしているみたい。でも、あんな料金を払ったらもっといい宿かと思いました！　私の住んでいた街の平均より、四割以上は高かった。

寝る場所について、「ソファーでいいです！」と私は主張しました。だって、どう考えても体格的に私だったらちょうどなんだもん。勇者様だったら絶対足がはみ出る。まして戦闘ではお二人しか働いていません。私はゆっくり陸馬さんの旅を満喫していただけなのだ！　動いてもないよ！　だからソファーで問題なしと思いました。

でもこの主張に、お二人と言うか意外なことに勇者様が首を縦に振りませんでした。

「体調を崩すかもしれないだろう。ベッドで寝ればいい」
「私はさっきまでずっと陸馬さんに乗ってました。それほど疲れてませんから、ソファーで大丈夫です」
こんな感じで、ベッドに寝ろ、ソファーでいいのエンドレスな会話に、神官様が笑顔でざっくり終止符を打ちました。
「入口近くのソファーには私が寝ます。真ん中の寝台にあなたが寝なさい。勇者は窓際の方で。そのほうが賊の侵入に対応しやすいでしょうし」
いつも通り言葉にナイフ並みの切れ味がありますよね！　そして笑顔も安定の迫力を備えています。
その内容に、私は思わず声を上げました。
「賊前提ですか！」
「ええ、賊前提です。警戒心は持っておいてくださいね。この街は……」
神官様は言いよどんだけど、続きを付け加えました。
「……人の心が、堕ちつつありますから」
神官様と勇者様は、それから程なくして外出しました。私はお留守番です！
いろいろ調べたいことがあるんだって。二人が出ていった後はきちんと戸締りするように、と言いつけられました！　……やっぱりものすごい子供扱いですか？　一度お二人の中の私への認識を

聞いてみるべきかも。
窓を開けて、外を見ます。王宮や神殿は綺麗なガラスがはまっていたけれど、そんな高級なものはこの宿にはありません。木の扉が付いてるだけ。ぜったい蝶番に油差してないな！　あんな値段の部屋なのに！　ギギギって耳に痛い音を出しながら窓がやっと開きました。
重い窓を開けて見た街並みは、たたずまいこそ本当に前の街とそれほど変わりません。なのに、この灰色の雰囲気はなんなんだろう？　これだけでなんだか息苦しいな。
路上で座り込んで、うつろのままに空を見上げる人たちを見たら、胸が痛みます。何とかならないかな、と思うけれど、私が何とかできるわけない。
私はなにか凄いものを持っているわけじゃない。財力があるわけでもないし、知恵があるわけでもない。勇者様たちみたいに、戦闘力があるわけでもないし、術を使えるわけでもない。できないことの方が多い。ないないづくしの町民です。才能なしの判定も受けてるしね！
だからこそ持っていないものを数えるより、できることを数える方がいいなって思って考え方を変えるようにしました。強制ポジティブですよ。これが雑草根性です。
空をあおいでその高さを嘆くより、何か一つでもできることを探して地面を睨む方がいいと思う。裏のおばあちゃんも言ってました。おばあちゃん元気かな。あれからずいぶん遠くへ来たものです。
どっちにしても考えていてもダメだよね、お腹が空くだけだよね！　と思考を切り替えて、とりあえず荷物整理に励むことにしました。無駄に腕まくりとかしてみる。やる気を体現するよ。
いくら体から老廃物が出ないからといっても、砂埃とかで服がドロドロだから洗濯場を借りな

きゃいけないし。さっき、宿に泊まる時に洗濯場のこととか、体を洗えるかを聞いておいてよかったね！　とりあえずできることがあったほうがいいかも。いろいろグルグル考えるのは正直苦手です。気分が落ち込んで、ダメになっちゃうから。

自分の荷物を整理してから、そういえば、お二人の服も洗ったほうがいいんだろうか？　と思い至ります。出かける前に先に了承を貰ったらよかった！

昔、パン屋で同僚の子が「お父さんに勝手に下着を洗われて恥ずかしかった！」って言ってたから、家族といえど恥ずかしいものみたいだし。でもなんでお父さんが下着を洗う状況になったの。今更凄く気になります。手紙で聞きたいぐらい気になる。でも手紙って意外と高級品だね。丈夫な紙もお金がかかるし、送るのもお金がかかる上に、今の状況だったら本当に着くかどうかわからないみたい。ちょっとだけしんみりしました。手紙っていいなあ。あこがれます、遠くに旅立った友達から手紙が来るとか！　今回の場合は残念ながら私が書くほうだけど。書いてみようかな……と頭の中で文章を考えてみます。

でもあっという間に挫折しました。

なんといっても、現状を説明できないですよ！　何を間違えたか勇者一行ですとか書いたら、絶対嘘だと思われる。しかも、神子（みこ）とか、普通に書けませんよ。どんな妄想ですかって突っ込まれて終わりだよ。親戚のところに行くって言った場所と違う街にいるし！

私はどうやら手紙の一つも満足に出せないようです。なんということでしょう。

そんなことをつらつら考えながら荷物整理をしていると、ドアがノックされました。

「……はい」

私は一応警戒しながら返事をしました。あれだけ言いつけられてますから。

「この宿の従業員です」

確かに聞き覚えのある声です。

ドアのチェーンをつけたままでちょっとだけ開けてみたら、さっきのいやな笑いをする男の人でした。そのお鼻でよくわかりますよ。

「お客様に、お茶とお菓子をサービスしているんですが、いかがですか？　食堂にいらっしゃってください」

そういってニヤァと笑います。ひい！　人を笑顔で差別してはいけないけど、笑い方が怖すぎますよ。知らない人に食べ物を貰わない……これは応用問題ですか？　でもまだ荷物整理が終わっていないから、すぐには行けないな。

「あとでお伺いします。それ、別料金ですか？」

とりあえず料金は重要なポイントだよね。いいえ、料金内ですって返事があったので、少し安心しました。食事付きはよくあるけれど、おやつ付きとは！　高級な宿は凄いですね。

「お待ちしております」

と従業員さんは去っていきました。なんだか、あの人、目が怖いですね。気のせいかなあ。

結局、先に用事を済ませることにしました。片付け優先だよね。それによく考えたらお二人がいると着替えるのに困りそうだから、さっさとお湯を借りて全部脱いで、体を拭いて着替えちゃいまし

た。とりあえず自分の荷物は簡単に整理したし、洗濯もしましたよ！　自分の身の回りだけだけど、やり遂げた達成感が心地よい疲れになっています。

　陸馬さんの背中に普段積んでいる荷物、陸馬小屋に預ける時に下ろしてたんだ。久しぶりにこれを片付けていたんですが。

「これどうしようかな……」

　荷物から引っ張り出した神子服。窓からの風に、薄い布がひらりと翻ります。これ、本当に必要かな？　ぶっちゃけ、いらないんですが。借り物だから勝手に処分することもできません。持ち歩くだけで汚しそうで嫌だな。汚れに強い星術を使ってるって聞いたけど、これも洗濯した方がいいのかな。ヒラヒラの神子服は正直洗濯の仕方がわからなかったから放置してるけど。領主様のお屋敷で、一度洗ってもらったし。でも荷物の底にずっと入れてたんだよね。かび臭くなっていないかな。

　じっと眺めていると、なんとなく不安になってきました。に、臭わないよね？　服に顔を埋めて臭って確かめました。うん、大丈夫っぽい。

「なにしているんですか」

　……はっ。

　ビクッとして振り向くと、神官様が微妙な表情でこちらを見ていました。そ、そんな目で見ないでください！

「おおおお帰りなさい」

「ただいま」

　動揺しながら言ったセリフに、律儀に勇者様がお返事してくださいました。ありがとうございます。さりげなく律儀大王ですね！　よし、ちょっと落ち着いたよ。

「今日はどうでしたか？」

「また明日も出かけなければいけません」

　申し訳なさそうに神官様がおっしゃいます。

「了解いたしました！　お留守番ですね」

　私、お留守番のプロを目指しますよ。握りこぶしを作りながら言います。

「用事があるときは同行しますから、一人では行動しないでください」

「大丈夫です、知らない街でふらふらしたら迷子になること間違いなしですよ。ウカツに出歩きません」

　力強く宣言すると、勇者様がこちらをちらりと見ました。なんですか勇者様、言いたいことがあるなら目で訴えないで口で言ってくださいっ。それは大丈夫なのかって思いましたね、あなた。

　窓に目を移すと、空の色が変わっていました。街はすっかり夕暮れ時です。少し風が冷えてきたから窓を閉めます。……ん？　なんだか景色がぼんやりと霞んでいるような気がして、私は目を擦りました。疲れ目かなあ。

　そんなこんなで一日目があっという間に終わりました。ちなみに、相部屋だって言っても、ドキドキイベントは起こりませんでしたよ！　とりあえず着替えを見るのはどうかと思ったので、その時は壁のほうを向いて本を読んでいました。そういえば野宿で一緒に寝ていますから、あまり変わ

りないですね。今更気づきました。

二日目。

驚愕の事実が判明しました！　勇者様は、宿でも超早起きだった！

私の体内時計は憎いほど正確です。必ず一回夜明け前にバッチリと目が覚めます。薄闇の中、ぱちっと目を開けたら、開いた窓の横に人影があって恐怖のあまり一瞬言葉を失いましたとも。暗いところでぼーっと立ってる人って、本当に怖くないですかっ。悲鳴をあげる前に、勇者様だってかろうじて気づいたからよかったけどね。

今日も元気で、朝の空気がおいしいです。もぞもぞと起き上がると、勇者様が小声で、

「起こしたか？」

とおっしゃいました。

「いいえ、ただの生活習慣です」

私も一緒に小声です。そういえば、いつも朝方の見張り番には勇者様が立っていました。神官様は夜に強そうですね。一応そうやって役割分担があるのかな？

「勇者様こそ、あまり寝てないんじゃないですか？」

昨日ベッドに真っ先にダイブしたのはなにを隠そうこの私です！　私より遅く寝て、私より早く起きるなんて、どれだけ働き者なんですかっ。疲れはちゃんと取れてますか？　疲れが溜まってバタンとかいったら大変です。

「十分に寝た」

とりあえずは、本人の申告を信じようと思います。見た目はお元気そうなので。ふらふらしてたら速攻ベッドに押し倒すつもりです。あれ、押し倒すは違うかな？　どっちでもいいや。それにしても、なにを見ているんだろう？　靴を履いて、勇者様の隣に立って見ます。

窓の外の景色は……夜ですね！　真っ暗です。何にも見えません。目線を辿ってみようかと思って、顔を見上げると、目が合いました。何で硬直するんですか勇者様。しばらく私と勇者様の無言のにらめっこが続きます。無言、というよりは、言葉を探してるのかな？　ややあって、勇者様が疲れたように呟きました。

「そんな格好で窓際に来るのは止めなさい」

言われて見れば、寝てるままの格好だから、結構薄いワンピースだけでした。失礼しました！　とりあえず窓から見えなければいいのかと思ってしゃがみこみます。下から勇者様を見上げました。これなら外から見えませんよ。万全です。

これでどうですかって見上げたんだけど、どうやら勇者様が本当に言いたかったこととは違うみたい。勇者様は遠い目をしてから私に目を合わせて、

「……先に着替えてこい」

とだけおっしゃいました。なんだか朝から疲れている様子でした。

着替えるといっても上からさらに重ね着をするだけです。さすがにこの部屋で下着のまま寝たりはできません。世間に向けて見せられる胸じゃないしね！　胸だけの問題でもないけど。

髪も簡単にまとめて、あっという間に着替え終了！　振り返ると勇者様はまだ窓の外を見ていました。熱心ですね。何かあるのかな。ようやく夜明けの時間帯になりました。けど、ほんのり空の色が変わっただけで、一気に明るくはなりませんでした。どうやら分厚い雲がかかっているみたい。

「なに見てるんですか？」

私も横から再度覗き込んでみます。けど、昨日見たのと大して変わりのない風景が広がっていました。うーん。ふいに勇者様が言葉を零します。

「瘴気がピンクに見えると言っていただろう？」

「はい、見えます」

「ここでは瘴気は見えるか？」

私はその言葉に街をじっくり見たけれど、あのどぎついピンクは見えませんでした。むしろ、黒と灰色に沈んだ、地味な色合いの街です。

「ピンクは見えませんけど……」

私の返答に、勇者様は一つ頷いて、考え込まれました。勇者様には何か見えたのかな？　すごく目が良さそうだしね。私はあいにくと何も見えません。

そうこうしているうちに神官様の寝台から音が聞こえました。起きたのかな。そう思って振り返って挨拶をします。

「おはようございま……」

す、の途中で私はびくりと飛び上がりました。神官様、上半身起こしたままぼーっとしています。

微動だにしません。目が半眼で危険な雰囲気です。そして、おもむろにポトと横に転がりました。えっ、二度寝ですか？　意外な行動を解説してくださったのは、勇者様でした。

「あと二回繰り返すと起きる」

さすが幼馴染、そのあたりの行動も熟知しているんですね。正直一人でこれを見たらとても怖かったかもしれません。その、普段とのギャップがすごすぎて。

それにしても神官様の髪には驚きですね。寝癖がありませんでした！　うらやましいっ。私の髪はすぐこんがらがって絡まって、ひどい時にはその辺りの枝とかにも絡まります。何度頭皮が痛い目を見たかっ。神官様の御髪はさらさらキューティクルですが、どんなお手入れをしているのか、相部屋になった今こそ調査するべきでした！　さっぱり忘れていましたが。

しばらくして神官様が本当に起きたのは、同じような行動を二回繰り返したあとでした。勇者様のお言葉的中！　拍手したいですが、早朝に迷惑なので控えます。心の中だけに留めます。

「おはようございます、神官様」

「おはようございます」

今度はきちんと返事がありましたよ。安心です。勇者様は顔を洗いに行くといって席を外されました。勇者様が帰ってきたら私も行こうかな。それとも先に何か食べようかな。おやつはついてても、実は食事は別だったのです。普通、逆だよね？　とりあえず、神官様が着替えるっぽかったので、勇者様みたいに壁に向かって座り込み中です。さっき窓のほう見てたのって、もしかして気を使ってもらったのかな。こうなると経済的な理由というよりは、プライベートを守るという意味で

男女別の部屋の方が心が安らぐのかも。
「それにしても早起きですね。お見苦しいところをお見せしました」
神官様が身だしなみを整えながらおっしゃいます。
「朝、弱いんですか？　それとも、昨日夜更かししました？」
「睡眠時間はそれほど必要ありません。頭が働くまで、少し時間がかかるんです」
それを俗に弱いというんだと思いますよ、神官様。でも微妙にいつもより返事がのんびりですね。……本当に、起きてますか？　寝起きに機嫌が悪い人もいるみたいだから要注意です。
神官様の着替えが終わったようなので、振り返りました。靴の紐を調節するのに屈んでいらっしゃるのですが、髪の毛が滑り落ちてきて、大変なことになっています。うわー滝のようですね。横で見ていても視界が狭いだろうなあって思うぐらいだから、ご本人にとってはかなり苛立ちの原因ではないでしょうか。サラサラの髪を鬱陶しそうにかきあげる神官様を眺めていると、前々から気になっていたことを思い出しました。このタイミングなら聞けるかも。
「神官様は、何で髪を伸ばしていらっしゃるんですか？」
せめて髪を切れば、今より女の人と間違われる確率がぐっと減るんじゃないかな！　……いや、髪の短い美女だと思われるだけ？　どっちの方がダメージが大きいんでしょうね。
「切りたいのはやまやまなんですが」
とうとう髪が邪魔になったのか、神官様は紐を取り出して一つに括りました。そういえば、たまに括った姿を拝見します。邪魔だったからですか。

「星職者は伸ばすことになっているんです。一応、誰が決めたかわからない決まりがあるので」
そういえは、神殿の方は特に髪が長いよね。おじいちゃんで髪がなくて髭が長い人を見ました。あれって規則だったんですか！　一つ賢くなりました。髪も髭もない人の場合は……うん、深く考えてはいけなさそうな雰囲気を感じました。
「とにかく、どこかを伸ばすんですね、どこかを！」
「どこかを……ですか。その言い方はどうでしょうね」
神官様の目が覚めてきたのか、ようやくいつものテンポに戻っています。おお、お目覚めですね。
「規則だから伸ばしてらっしゃるんですね」
神官様みたいに似合う人だったらいいけど、ゴツイお兄ちゃんとかだったら悲惨極まりないことになりそうですね。そう考えると恐ろしい規則です。想像力だけは逞しいので、いろいろ想像して一人でトリハダ立てました。神官様は少し笑っておっしゃいます。
「全員ではありませんよ。中には理由がわからないものに従えないと、髪を短くする者もいます」
なんと、反抗期ですか！　神殿でまさかの反抗期なんて、あるんですかっ。星職者と反抗期、違和感しかありませんね。反抗するぐらいだったら、ツルッツルにそりあげるとか？　私の想像はすごいことになっているのですが、神官様は淡々と続けられました。
「規則というものは、理由があって生まれているものです。人間が作ったものは、何らかの時代背景と必要があって成立しています。ただし形骸化しやすいのが問題ですが。……さて、髪を伸ばしている理由に戻りますが」

規則だからじゃないんですか？　私はきょとんとしました。
「星職者で、星術に長けているものは特に伸ばす傾向にあります。万が一、術で存在値を犠牲にしなくてはいけなくなった場合、痛覚がなく質量が大きい場所として、一番切り捨てやすい部位が髪や髭になりますから」
存在値。どこかで聞いた単語です。この単語はまだ正確な意味がわかっていません。漠然としたニュアンスで流してしまったけど、この際質問します。
「存在値ってなんですか？」
「あなたがここにいるために働いている力のことです。世界にあるもの全てが持っている力ですね。生命力という説もあります。ともかく、星術は自分が持つそれを消費した上で、星語を介し、世界に他の何かを存在させるために変換させているんです」
だんだんまた難しい方面になってきました。私の目がさまよっているのに神官様はすかさず気づいたようです。
「つまり、存在値とはもともと持っているお金、星術とは買い物、と考えてください。お金がないと物が買えないのと同じです。それが一番わかりやすいたとえでしょうね」
それだったらわかります、初めからそう言ってくだされぱいいのにっ。最近の説明は、だんだんと噛み砕かれてきました。
「で、髪の話に戻ります。どうしても買いたいものがある。手持ちが足りない。つまり、術を実行したいが、自分の能力を超えている結果を出そうとした時が問題なんです」

「諦めて買わずに帰るっていう選択肢はっ」
私がよくする行動ですけどね。買い物へ行って、お金が足りなくて諦めて帰ります。
「たとえ話に、あまりにも自由な条件は与えないでください。ともかく。そういったときに、体のどこかを直接渡せば足りない分を大きく補うことができます。腕や足を差し出すよりも、髪を差し出したほうが被害が小さくすみますよね。万が一の時のために、魔術師や神官は、髪や髭が長い者が多いんですよ」
意外と恐ろしい世界なんですね、星術って。よくわかりました、先生っ、ありがとうございます！
そうすると、ちょっと不思議なのが勇者様。いくら剣を使うからといっても、ガンガン星術を使っていたはず。でも、髪が短いですよね？
「勇者様も髪や髭を伸ばさないんですか？」
自分で言って、似合わなさそうだなと考えていると、
「似合いませんね、壊滅的に」
と神官様があっさりとおっしゃいました。そこからですか。う−ん、ヒゲの勇者様。乙女の夢的な何かとはとても遠いところにありそうです。マニアックな方の心はくすぐるかもしれませんね。
「勇者は……そもそもの存在値の量が違いますから。だからこそ勇者になったようなものです。多すぎて垂れ流し状態だと思ったほうが近いでしょう」
それはどんなイキモノですか。
「星原樹（せいげんじゅ）も似たようなものですよ。あれも存在値が多すぎて、力を常に放出しているため人が近づ

けないんです」
　思わず部屋の隅に置いてあるお枝様を見ました。神官様が街に入る前にかけてくださった封印でその中身は見えないけど。そうか、臭いではなく何かが出ているから嫌われているんですねっ。なんで神官様が葉っぱ触っただけで怪我したりしているのかなーって思っていました。謎がちょっと解けましたよ。
「あ、だから勇者様はあんまり人に触らないんですか？」
　華姫(はなひめ)様がおっしゃっていたことを思い出しました。
「それも一つの理由でしょうね」
　まだ理由があるのかな？　神官様が言葉を濁(にご)すっていうことは、あんまり聞かない方がいいのかも。それよりも気になることが出てきました。
「でも、私はどっちに触っても大丈夫ですよね？」
　全く問題ない上に、元気に生活しています。にぶいどころじゃ、ないの？　もしかして、生物的に間違えてる？　ゴリゴリ不安が水増しされていきます。神官様は、それはそれは美しくにっこりと笑われました。
「丈夫なんでしょうね」
　えっ、そういう扱い？　う、うん、丈夫なのは否定できませんがっ。
　そうこうしているうちに、勇者様がお帰りになりました。さっきの話を思い出して、思い出し笑いをしてしまって、不審な目で見られたのはしかたないですよね。ヒゲ。

　結局、夜が明けても、太陽は出ませんでした。今日はどんよりとした曇り空です。暑くなくていいですね。どんな天気にもいいところがあるはず！　洗濯には不向きです。あ、昨日勇者様たちにお伺いしたところ、洗濯はやんわりと断られました。
「いつでも洗濯物あったら、言ってくださいね！　ぱんつでも御遠慮なく！」
　お出かけするお二人のお見送りのときにそう言うと、勇者様が遠い目になっていました。何か言われるか構えてたけど、結局何も言われませんでした。ぱんつは微妙でしたか？
　そんなこんなでお留守番二日目です。今日は本当にすることがなくなってきました！　それこそぱんつでも洗うのに。でも曇り空だから、生乾きになってもいけませんね。うーん、昨日聞いてたお茶でも頂きに行こうかなあ。それとも昨日漠然と考えてた手紙計画を実行すべきでしょうか？
　少しだけ考えた末に、私は朝食代わりの乾パンを食べて、一階に降りていきました。カギをするのを忘れそうになったけど、ちゃんとかけましたよ。

　出発で混みあう時間が過ぎていたせいか、部屋から食堂まで、誰にも会いませんでした。それにしてもこの宿は閑散(かんさん)としていますね。本当は流行っていない疑惑がっ。だって、あれだけの値段で一部屋ですよ！　でも、満室だったから一部屋しかとれなかったのに、本当に活気がありません。一階に食堂があるって聞いていたから、そこへ向かいます。
　ここかな？　と入口からそっと覗きます。想像以上に狭い食堂でした。料理の香りも薄まっています。誰かが食事をしていたらふんわりいい匂いが香るよね。それがあんまりない。皆、ここで食

べていかなかったのかな。流行っていない疑惑、ますます濃厚です。昨日聞いたお茶を貰えたらと思ってきたけど、想像以上の静けさにためらいます。
「あ、お客さん、いらっしゃってたんですか」
ひぃ！　背後から声をかけられて、文字通り私は飛び上がりました。心臓が止まるかと思うじゃないですかっ。バクバク跳ねる心臓のあたりを押さえながら振り返ると、例の従業員さんが背後に立っていました。怖いよ！　気配感じませんから！　毛穴が広がって、毛が逆立ちそうです！　ハリトカゲが背中のハリを逆立ててるのはこんな気持ちかもしれませんね。
　私は動揺を押し隠しながらお伺いします。
「お茶って、いただけるんですか？」
「はいはいどうぞどうぞ」
　相変わらず笑顔が微妙ですけど、中に入ることを勧められました。入口の傍の二人がけの席に腰を下ろして、ぐるっと中を観察します。席の数はそれほどありません。十人ちょっとで満杯かも。本当に宿に泊まっている人専用の食堂みたいだから、それぐらいでもいいのかな？
　程なくして、簡素なコップに入ったお茶が出てきました。小さな乾燥した木の実が数個、お茶請(ちゃう)けについています。お茶請けとは豪華ですね！　お礼をいい、お茶を口に含みます。ちょっと苦いな。何のお茶だろう？　最近いいお茶ばっかり飲んでいたから、舌が慣れちゃったに違いありません。いくら苦くても、頂いたものは残せないしね。
　従業員さんが奥から戻ってきて、じっと私を見ます。な、なんですかっ。私がお茶を飲んでいるのがそんなに不思議ですかっ。
「お連れさんは、おでかけですか？」
　話しかけられました。従業員さんの目が、なんだか苦手です。とりあえず大きなお鼻の辺りに目線をおきますよ。失礼じゃないよね？　目を合わせにくいから仕方なく、です。
「は、はい、私だけ残っています」
「そうですか。時にお客さん、市(いち)についてご存じですか？」
「市、ですか？」
　街で定期的に開かれている市場のことじゃなさそうです。首を捻っていると、私が知らないのに気づいたみたい。
「この近くで、明日大きな市がたつそうですよ。他の方々はそちらに参加するようで、手続きに行かれたようですねぇ」
　へー。ちょっと興味が出てきました。あとで神官様にでも聞いてみようかな。買物がどうとかっておっしゃっていたのは、市がたつからかも。
「珍しい競売もあるとか」
　そこで言葉を切って、従業員さんは意味ありげにニヤァと笑いました。
「ご存じ、ありませんか？」
　なんですかそのセリフのタメは。ど、どう反応をすればいいんだ。冷や汗をかきっぱなしです。
知らないです、と首をぶんぶん振ると、そうですか、とあっさり話が終了しました。

従業員さんはそれから二、三言だけ話して食堂を出ていきました。私はぶるっと体を震わせます。なんでしょうね。

お茶もなくなったし、従業員さんもいなくなったのでさっさとお部屋へ退散です。なんだかこう、従業員さんのねっとりとした視線が本当に苦手です。値踏みされてるみたい。どうせ胸はありませんよ！　魅力が薄いのは承知しております。

部屋に帰ってしばらくぼんやりとしていました。昼寝するほど疲れていないしと考えていたところ、ふいにドアがノックされました。誰だろう？　お二人なら、ノックをするまでもなく、鍵を持っていて入ってこられるから、違う人です。

「……はい」

私は警戒しながら返事をします。

「この宿の従業員です」

さっきの人です。うう、なんだろ。ドアを今回もチェーンをつけたまま開けてみたら、例のごとくお鼻が見えました。開ける気はサラサラありません。従業員さんは狭い隙間から、小さく折りたんだ紙切れを差し出してきました。

「お連れ様から手紙です」

え？　手紙？　こんな狭い街の中で？　しかも、わざわざ紙に書いて？　いくら私が手紙をほしいと思ってても、こんなに身近にいる人たちから貰ったら戸惑いますよ。

私が不思議に思ったのが伝わったのか、慌てたように宿の人は付け加えました。

「伝言ですから！　ちゃんと渡しましたからね！」

「はあ……」

でも伝言するぐらいだったら、部屋に帰ってきてくれたらいいのに。神官様とか、無駄が嫌いだからこんなにまどろっこしいことするかな。

私は首を捻りながらとりあえず手紙を開きました。

『急用ができたので、こちらに至急来てほしい』

簡潔な文章は共通語の殴り書きです。その下には簡単な地図が付いていました。うーむ。ぶっちゃけ、方向音痴なんですがっ。一人で外出していいの？　もしかして初めてのおつかいとか言うノリですか？　何の用だろう？

よくよく地図を見てみると、ここからそれほど離れた場所ではないことがわかりました。これなら行けそうかな。

私は最低限の必要なものを手に取ると、広げていた荷物を片付けました。窓を施錠します。お枝様は邪魔だし、街中では使えないだろうから置いていっていいよね。ここに置いておいたほうが結界もあるし安全です。私の背の高さと同じぐらいあるお枝様、持って歩くのって実はかなりの邪魔。普段は仕事だから諦めてるけど、この場合は必要なのかな。しばらくお枝様を眺めて悩んだけど、やっぱりいらないと判断して、部屋に置いていくことにしました。

本当に用事ってなんだろうと首を捻りながら、私はカギをかけて、街に出かけました。

立ち読みサンプルはここまで

五十歩も行かないうちに、早くも宿を出たことを後悔しました。纏（まと）わりつく視線が、大変鬱陶（うっとう）しいです。私は敢（あ）えて周りを見ずに歩きます。前に勇者様たちといた時にあった、お姉さんたちの厳しい視線とは別のイヤラシさがある視線。全身トリハダたちまくりだよ。どう見てもいいカモが歩いているぜヘッヘッへな目線ですね！　怖いって！　私は見た目どおりお金を持っていませんから、お構いなく。

やっぱりこの街って怖い。

柄が悪いっていうんですか、なんかメインストリートなのにすさんだ雰囲気です。気力をなくしたように座り込む人たちがちらほら見えて、道のそこかしこにゴミが沢山溜まっていました。それがなんともいえない嫌な臭いを発しています。道も、建物も汚れているように見えます。でもそれを掃除しようとする人がいないんだろうな。必死な表情をしている人もいるけど、でもそれは決して幸福な方向に進んでいる人の表情じゃない。

――人の心が堕（お）ちかけています。

神官様の苦しそうな声が、頭の中に甦（よみがえ）りました。何とかしたいのに、なんともできないのを知っているもどかしさ。たぶん、おっしゃりたかったのはこの雰囲気のことですね。瘴気（しょうき）とはまた別の重い空気が街を包み込んでいるから。

道路を近所の人と一緒に掃除したり、ほがらかに挨拶したり。そんな風な当たり前だったことが当たり前じゃなくなっている世界。どうしようかな、帰ろうかな！　でも、本当に何の用事なのかな。

悩んで足を止めかけて、それに気づきました。なんだか後ろに気配を感じるんですよっ。小動物並みに最近気配に敏感です。何かが研ぎ澄まされてきてるのかも！　うそです、調子に乗りました。いつもは、声をかけられるまで気付きません。誰かにつけられてる？　まさかね。

どちらにしても、この街では私は浮いています。

ぎゅっと簡単な荷物を入れた小さなカバンを、胸に抱え込みました。手に汗をかいています。目立つといっても派手な格好しているとかじゃないです。さすがに神子装束（みこしょうぞく）じゃないよ！　あんなひらひらは荷物の底に片付けなおしました。前の街を出てくるときに買った、庶民に人気の丈夫な旅装束です。地味だから目立たないはずなんだけど。周囲をチラチラ見て、気づきました。地味じゃなくて、もしかして清潔なだけでも目立ってるんですか私。それに、女の人自体が見当たりません。うわあん。

かかとの低めのブーツだから、運動しても足が疲れにくいはず。やっぱり背後の気持ち悪い気配が消えないから、小走りで進みます。地図をちらっと見たけど、まだ道半分です。

早くも息があがってきました。もうちょっと体力がほしいな。勇者様並みに体力セレブになりたいものです。むきむきはカンベンだけど！

女性が歩いていない。これが指していることに、さすがの私でも薄々気づきました。つまり、出歩くことが危険だということですね！　泣きたくなってきた。

うわあー後ろにまだまだ誰かの気配があります。